

霧隠軒より折々によせて（第二回）

『天地の理に則し《らしく》生きる』

もうかれこれ四十年も前。小学校を卒業したのは、そんな昔のことになった。それなのについこの間のよう鮮明な記憶が残っているのも、またこの頃のことである。

五年、六年とK先生が担任であった。大学を出たての澆刺はつらつとした先生で着任早々に担任になった。声が大きく、行動も大胆であった。スポーツが得意で音楽は苦手。

宿直の夜など近くの生徒が遊びに行けば、昼間捕まえた雀すずめの焼き鳥を食べさせてくれた先生でもあった。もちろんこれは当時許されていた行為。

男生徒も女生徒も皆好感を持ち、全幅ぜんぶくの信頼と一種の尊敬の気持ちを抱いていた。その先生が、卒業の時の寄せ書きに書いてくれた言葉が「らしく、ぶるな」であった。

これから皆は中学生になる。そこで中学生らしくあれ、

しかし中学生ぶつてはならないと添え書きのあったことを今でもはつきりと憶い出せる。

以来幾多の変遷を経て小柄は出家の道を選び、禅僧として生きている。

あの頃の友も、また種々の辛酸を舐め禍福の世を生きてきただろうが、先生のこの言葉を覚えているだろうか。小柄は忘れることができなかつたばかりか、人生の節目、修行の節目でこの言葉の重みを肌で知つたのだ。

しかし、「らしく」という言葉は、この頃は評判が悪いようである。多分「らしくあれ」の強制的な要素が、人の心を萎縮させ、画一的な精神に導いていくという発想であろう。戦前の教育が全くそうであつたように。

さて、先日ある雲水が自暴自棄になつたのか、「自分の無能力にはほとほと嫌になります。頭の悪い所為か、修行のことなど何も分かりません」と言う。

理解できないことではない。修業に真剣であればこそ
の叫びであろう。

そこで「世の中の頭の良い連中は、悪いことばかりする」と答えてやった。

すると、この雲水は暫く呆然としていたが、その意味を覚ったらしく、頷いてから低頭して退出していった。

彼は感動した訳ではない。それは妙に納得したという顔付きであった。つまり「なあんだ、俺は俺か。自分は自分であればよいのか。そうすることで修行になっただのか」ということだろう。

こんなことを「らしくあれ」と表現する。他からの強制ではない。自分に目覚めて自主的に己を律してゆく。この自制が「らしく」の意味である。

それでも齢を加えるに従って、人は大判「ぶる」人生を送る。なかなからしくとはならぬ。これが年々その言葉の重みを知る理由だ。

「らしく」とは、仏教では「如法」と言う。如法とは、天地の理に逆らわないこと。それ故「ぶる」ことに比し

て如何に難しいことか。